

後期旧石器時代後半期前葉の赤城山南麓から大宮台地における 小形ナイフ形石器群の研究

小 原 俊 行

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに	3. 石器群の検討
1. 赤城山南麓～大宮台地という地域単位	4. 考察
2. 当該期の石器群の分類	

— 要 旨 —

赤城山南麓から大宮台地の地形は現在、利根川と加須低地によって分断されているが、後期旧石器時代には、大宮台地は館林へと続く「大宮～館林台地」として地形を形成していた(堀口 1993)。そのため、本論では赤城山南麓から大宮台地を1つの地域単位として石器群を分析した。特に後期旧石器時代後半期前葉、すなわちV層・IV層下部段階に認められる小形ナイフ形石器群について言及した。

赤城山南麓では黒曜石製の小形ナイフ形石器群は殆ど認められず、黒色安山岩とチャートを多用している状況が見受けられた。これとは対照的に、大宮台地内では黒曜石製の小形ナイフ形石器群が一定数認められる。しかし、台地内を南下するに従って遺跡規模が縮小する傾向がある点と、石器集中部内に含まれる黒曜石以外の他石材の割合が多くなる傾向があることを指摘した。

これらの地域に認められる石器群は構成する石器石材が大きく異なるものの、ナイフ形石器や角錐状石器の製作技術が類似する。そのため、これらの石器群は共通した石器製作技術にから成立しているものであると判断した。加えて、赤城山南麓で黒曜石を主体とした石器群が殆ど認められない原因は、黒曜石を主な生業域である大宮台地以南で使用するために、その消費を限定したからであると想定した。

キーワード

対象時代 後期旧石器時代後半期前葉
対象地域 赤城山南麓から大宮台地
研究対象 小形ナイフ形石器

はじめに

後期旧石器時代後半期前葉は、群馬 5 期編年(小菅・大工原・麻生 2004)におけるⅢ期に該当し、関東地方南部のⅤ層・Ⅳ層下部段階が相当する(関口 2008)。前後する時期、及び関東平野内の他地域と比較して、本地域での遺跡数とその規模は本時期に極端に減少することが知られている(小菅・大工原・麻生 2004、小菅・西井 2011)。一方、利根川を挟んだ大宮台地では、本期において遺跡数は爆発的に増加する(西井 2004)。

これら両地域は当該期の地形を考慮すれば、本来別地域として扱われるべきではないことから、両地域を含めた上で石器群を再検討することの必要性が説かれてきた(田代 1997、西井 2004)。そのため、本論では赤城山南麓から大宮台地までの地域単位の有効性を概観した上で、これらの地域で出土した石器群の分析を試みたい。

1. 赤城山南麓～大宮台地という地域単位

赤城山南麓から大宮台地の地形は現在、利根川と加須低地によって分断されており、地形的に連続していない(図 1)。しかし、これは関東造盆地運動による関東平野中央部の沈降運動と、その後の利根川の流入によって形成されたものである(堀口 1981・1993、菊池 1981)。

荒川低地と中川低地の地下地質の調査によって、これらの低地の地下には深さ30～40mに達する深い埋没谷地形があることが判明している(Matsuda 1974、菊池 1981)。対照的に、現在の利根川に沿う加須低地には、沖積層基底の時代、すなわち最終氷期の海面最低下期において、特に大きな谷が形成された痕跡が見当たらない(菊池 前掲)。そのため、かつての利根川が加須低地を流れて谷を刻んだ事実がないこと、つまりは利根川は荒川筋を流れていたと考えられる(菊池 前掲)。

本論での対象時期にあたる後期旧石器時代後半期前葉は最終氷期最寒冷期に該当する。この時期において、大

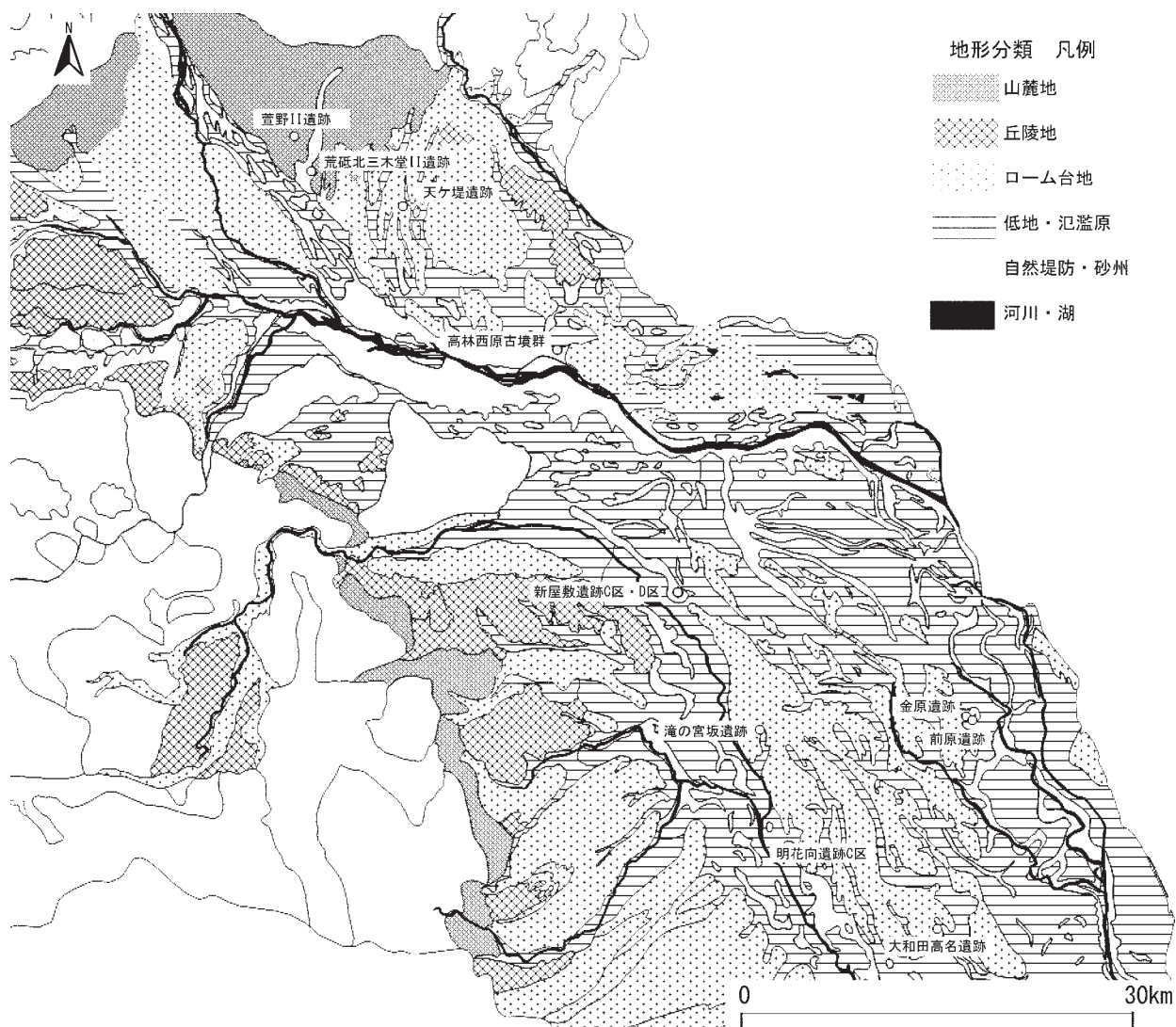


図1 赤城山南麓～大宮台地の地形分類図と対象遺跡(QGISを用いて作成)

宮台地は館林へと続く「大宮～館林台地」として地形が形成されていた(堀口 1993)。また、この台地の東西には荒川谷と中川谷が形成されており、最終氷期最寒冷期においては河川の浸食作用によって高低差30～60mに達する峡谷になっていた(堀口 前掲、菊池 1981)。

上記の理由から、赤城山南麓から大宮台地は本期においてひとまとまりの地域単位として見なすことが可能である。この問題は以前から認識されており、群馬地域と大宮台地を関連させて研究を進めることで、石器群の変遷過程を捉え直す必要が説かれてきた(田代 1997、西井 2004など)。

しかし、従前の研究までは、その必要性が説かれるものの、本地域単位による分析がなされていなかった。そのため、本論においてその分析を試みる。

2. 当該期の石器群の分類

筆者は以前、赤城山南麓の始良Tn火山灰降灰以降(町田・新井 1976)から当該期石器群について編年案の構築を目的とした分類を行った(小原 2016)。ここでは、大宮台地の石器群を踏まえた上で、改めて分類の枠組みを検討したい。

大宮台地の石器群については、西井氏が精力的に分類を行っている(西井 1991・1995・2004)。近年の分類案(西井 2004)の内容を概観すると、本地域内での石器群はa～d群の4つに分類することが可能とのことである。

a群は、殿山遺跡第1次調査や提灯木遺跡第3文化層などの石器群である。この石器群には国府型ナイフ形石器、切出形石器、黒曜石製のナイフ形石器を組成することが特徴とされる。また、出土する黒曜石製のナイフ形石器は、縦長剥片を素材に打面部に基部を残すことが特徴とされる。

b群には提灯木遺跡第2文化層、中原後遺跡の石器群が挙げられる。これは大形の角錐状石器と切出形石器を複数含む点が特徴とされる。また、これに伴うかたちで小形のナイフ形石器を組成する。石器石材には頁岩やチャートが主に用いられる。

c群には中川貝塚、北宿西遺跡、大和田高名遺跡などが挙げられる。この石器群はb群とd群の中間的様相を呈し、ナイフ形石器と切出形石器の区分が不明確になる。また、角錐状石器にも大形品が認められなくなり、小形のものが多く認められるのが特徴となる。石器石材もガラス質黒色安山岩と黒色頁岩を主体とする。本地域内の当該石器群の多くはc群に当てはまる。

d群に明花向遺跡C区、新屋敷遺跡C・D区、滝の宮坂遺跡の石器群である。黒曜石が多用され、基部が丸くなるナイフ形石器と台形石器を組成し、角錐状石器は小形のものが多くなる。また、他の石器群と異なり、d群は礫群を伴うことが多い。

一方、筆者は赤城山南麓の当該期石器群を以下の3つに大別した(小原 2016)。

(1) 切出形石器と角錐状石器、及び縦長剥片製作技術の石器が伴う石器群

今井見切塚遺跡第III文化層1a地点、1b地点や今井三騎堂遺跡第III文化層第1地点が該当する。ナイフ形石器、切出形石器、角錐状石器を組成するが、概してナイフ形石器は2～4cmと小形である。また、主要石材は信州系黒曜石、黒色頁岩、黒色安山岩と多様である。

(2) 切出形石器と角錐状石器が伴う石器群

今井見切塚遺跡第III文化層第9・11・12地点、峯山遺跡第1文化層が該当する。大形の角錐状石器と切出形石器を組成する一方、小形のナイフ形石器を伴う点の特徴である。これらの切出形石器とナイフ形石器の多くは素材を横位に用いて製作されている。

(3) 縦長剥片指向の小形ナイフ形石器を伴う石器群

荒砥北三木堂II遺跡第II文化層、天ヶ堤遺跡第2文化層、萱野II遺跡第2文化層などが該当する。これらの遺跡では素材を縦位に用いたナイフ形石器が主体的に認められるが、そのサイズは最大長2～4cmの小形品である。また、黒色安山岩や黒色頁岩、チャートが積極的に用いられるが、信州系黒曜石は搬入品としてしか認められないことが多く、出土点数も極端に少ない。

筆者が分類した石器群と西井氏の分類の対応関係を検討するならば、幾つかの共通点があることがわかる。

まず、大形の角錐状石器と切出形石器を組成し、小形のナイフ形石器を伴う点で、西井氏のb群と筆者の(2)が共通する。また、筆者の(1)も、西井氏のc群と相關する可能性がある。

これらの対応関係はより詳細に検討する必要があるが、d群に対応する可能性がある石器群は赤城山南麓にあるだろうか。

西井氏がd群として分類した石器群は、明花向遺跡C区が調査された当初、砂川期以降の所産として、より新しい時期の石器群として捉えられた(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984)。しかし、その後、須藤氏による渋川遺跡第2地点と男女倉遺跡B・J地点を対象とした、中部高地における尖頭器石器群の成立過程の検討や(須藤 1989)、西井氏による新屋敷遺跡C・D区の検討(西井 2001)を経て、現在は本期のうちでも砂川期直前のIV中亜段階(伊藤 1991)、所謂「V層・IV層下部段階最新段階」(国武 2003)に該当すると位置付けられている。

この石器群の特徴は前述したとおり、黒曜石の多用、基部が丸くなる小形のナイフ形石器及び小形の角錐状石器の存在が挙げられる。赤城山南麓には、この特徴にそのまま該当する石器群は殆ど認められない。しかし、(1)がc群、(2)がb群と対応する可能性が高いことを考えると、最も該当する可能性が高いのは、(3)「縦長剥片を

指向する小形ナイフ形石器を伴う」とした石器群となる。そのため、これらの石器群の関係性を検討するために、該当する資料を改めて検討する。

3. 石器群の検討

3-1 赤城山南麓の小形ナイフ形石器を伴う石器群(図2)

該当するのは荒砥北三木堂II遺跡第II文化層(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008b)、天ヶ堤遺跡第2文化層(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008a)、萱野II遺跡第2文化層(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010)、高林西原古墳群(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006)などである^(註1)。これらの石器群はいずれも浅間板鼻褐色軽石群(新井 1962)を含むローム層中から検出されている。

荒砥北三木堂II遺跡第II文化層は黒色頁岩主体の石器群である。ナイフ形石器は黒色頁岩製と黒曜石製のものが各1点出土しているが、サイズは最大長3cm以内で概して小形である。拳大のサイズの黒色頁岩製の円礫ないし扁平礫を素材として、礫面を直接打面として縦長剥片もしくは幅広の剥片を製作していたことが、接合資料か

ら伺える。また、黒曜石は上記のナイフ形石器も含めて6点検出されているが、全て和田峠産である。

天ヶ堤遺跡第2文化層では総点数85点の石器集中部が1つ確認されている。集中部から出土している石器の石器石材は、その殆どがチャートである。また、出土したナイフ形石器6点も全てチャート製であり、いずれも長さが2.5cm前後と小形である。素材を縦位に用い、先端部の両側縁部に集中して二次調整が施される。チャート製の石核及び接合資料も石器群の中に若干認められるが、形態は不安定である。

萱野II遺跡第2文化層は黒色安山岩主体の石器群で、275点の石器が出土している。ナイフ形石器は黒曜石製と黒色安山岩製のものが出土しているが、いずれも縦長剥片を素材に縦位に用い、サイズは最大長3～4cm前後と小・中形の範囲に収まる。黒色安山岩の分割礫を素材として、分割面を打面として幅広の剥片を連続的に作出する傾向が強い。黒曜石製石器はナイフ形石器1点のみの出土であるため、搬入品と判断される。なお、この黒曜石の原産地は分析の結果、和田峠産と報告されている。

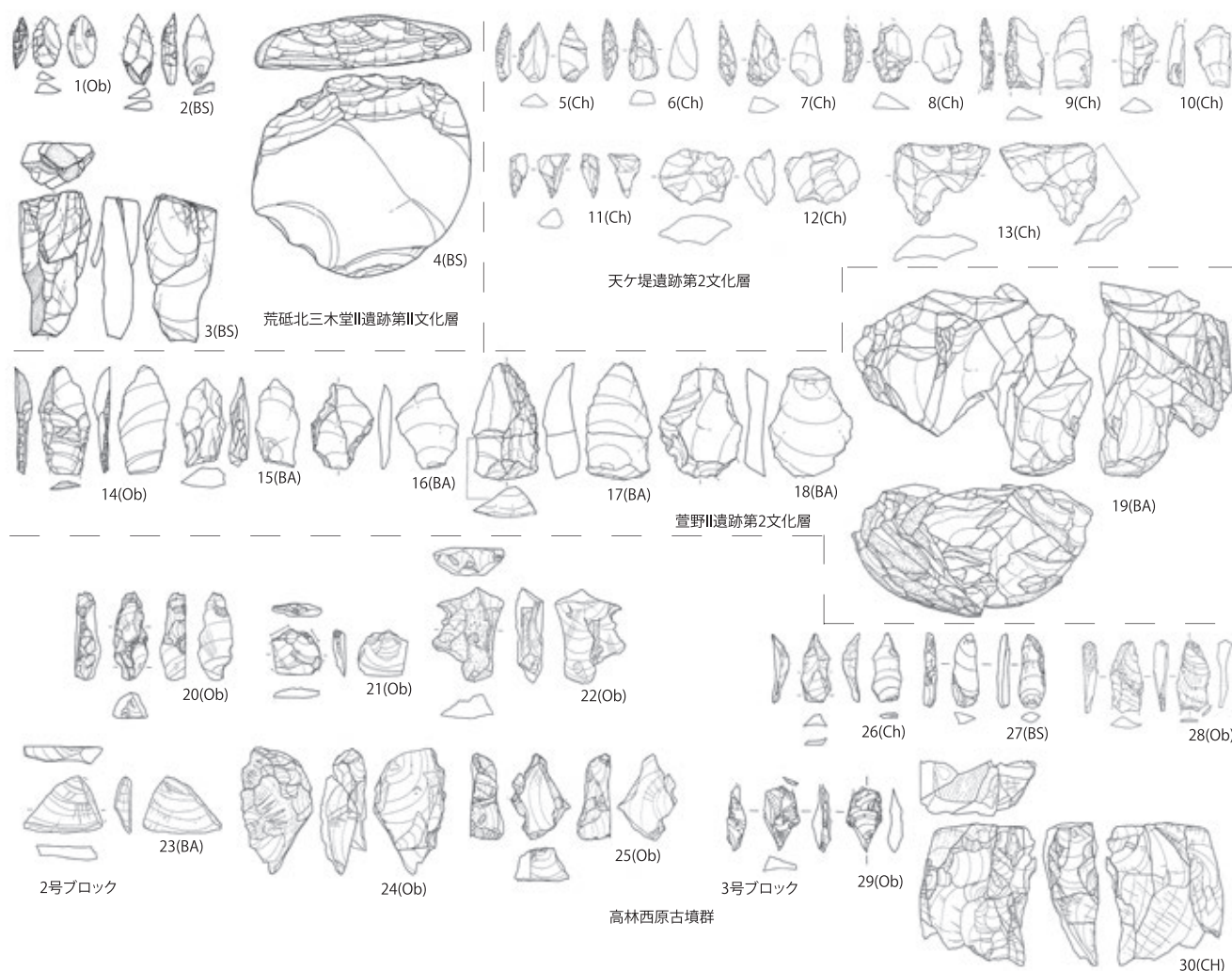


図2 縦長剥片を指向する小形ナイフ形石器を伴う石器群(S=1/3)

高林西原古墳群では、2号ブロックと3号ブロックが該当する。

2号ブロックでは122点の石器が検出されている。その多くが黒曜石製であるが、大半は碎片類である。出土した石器には剥片類の他に角錐状石器がある。角錐状石器は2点あり、報告書では製作途中の未成品とされている。いずれも小形で、縁辺に微細な剥離面が連続することが認められる。また、石核と判断できる石器は認められないが、同一母岩の可能性の高い石器が集中して検出されている点、接合資料が一定数認められる点から、本遺跡内で調整加工等が行われたと判断できる。また、これら黒曜石製の石器は原産地分析がなされていないものの、肉眼観察から信州系のものであると判断される。

対照的に、3号ブロックでは1カ所の石器集中部から156点の石器が出土している。その多くが同一母岩からなるチャート製である。本チャートは節理面を残した大形・扁平・方形の剥片として遺跡内に持ち込まれ、残核として廃棄されるまで消費されたと考えられる。このチャートからは剥片を縦位に用いたナイフ形石器が出土している。また、ホルンフェルス製・黒曜石製のナイフ形石器が相伴している。ホルンフェルス製のナイフ形石器は縦長の剥片を用いており、打面は残置されている。また、裏面の先端部には背面側から平坦剥離が連続して施されている。黒曜石製のナイフ形石器にも同様の加工が施されていることが伺える。なお、黒曜石の原産地分析は行われていないものの、信州系のものであると判断される。

上記において、赤城山南麓の縦長剥片を指向する小形ナイフ形石器を伴う石器群を改めて概観した。これらの石器群では素材を縦位に用いたナイフ形石器が主体的に認められるが、そのサイズは最大長が2～4cmと小・中形の範囲に収まる。

また、用いられる石器石材は黒曜石・黒色頁岩・黒色安山岩・チャートと多様ではある。しかし、主要石材となるのは各集中部内で1種の石材に限られる傾向が強い。特に、本地域では黒色安山岩とチャートといった石器石材が主要となる。

黒曜石は多くの遺跡において、搬入品のかたちで認められるのみで、積極的な消費が行われていない。また、各遺跡で行われている原産地分析や、肉眼観察の結果では、これらの黒曜石は専ら和田峠・諏訪を中心とする信州系黒曜石によって占められている。高林西原古墳群2号ブロックが例外的に黒曜石で占められる石器集中部であるが、碎片類の出土が多い点、出土した角錐状石器が未成品と推定される点などから、やはり積極的な消費を行ったというより、移動途中の製品のメンテナンスを行った痕跡であると考えられる。

3-2. 大宮台地におけるd群石器群

・新屋敷遺跡C区・D区(図3)

本遺跡ではC区とD区それぞれの調査によって、計9カ所の石器集中部が礫群と共に検出されている(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996、同 1998)。これらの石器群は分布から主に4つのグループに分られている。本遺跡からは黒曜石製のナイフ形石器が多量に検出されているが、特に集中しているのは石器集中4・5と、石器集中9のグループであり、いずれも埋没谷の奥まった位置に属する。出土点数が最も多いのは、埋没谷の西側の谷頭に位置する石器集中1～3・7のグループである。しかし、本グループは剥片・碎片類が多くを占めるため、ナイフ形石器などの特定器種の出土点数は多くはない。

これら各グループのナイフ形石器の多くは素材剥片を縦位に用いて打面を基部側に設定するものが多い。横位に素材剥片を用いて切出形石器の製作も行われているが、いずれのグループにおいても散漫に認められるのみで、集中しない。また、角錐状石器も石器集中集中1～3・7と4・5のグループを中心に見受けられる。こちらもあり小形であり、鋸歯縁状の二次調整も施されていないため、小形のナイフ形石器との分別が困難である。

石核については盤状の角礫・垂角礫ないし大形剥片を素材とし、これらを直接持ち込んで不定形もしくは横長の剥片を剥離している状況が伺える。

・滝の宮坂遺跡(図4)

滝の宮坂遺跡では礫群に伴って4カ所の石器集中部がまとまって検出されている(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997)。石器総点数は740点であり、7割近くが黒曜石製である。ナイフ形石器と切出形石器は18点(同図 1-17)、角錐状石器は4点(同図 18-21)出土している。ナイフ形石器は素材剥片を縦位に用いる場合、打点を基部・先端部に設定するものの両方が見受けられる。基部に設定する場合、打点は縁辺に近接するように設定されている。剥片を横位に用いて切出形石器を製作する場合、両側縁は平行するように製作される。加えて、二次調整の段階において、縁辺が鋸歯縁状を呈するように調整されているものも認められる。

角錐状石器は概して小形であり、二次調整の範囲が全周に及んでいる点以外はナイフ形石器と同様の技術で製作されている。

石核や接合資料からは、黒曜石製の礫面が付いた状態の大形剥片や、垂角礫を遺跡内に持ち込んで消費していることが伺える(同図 22、23)。但し、石核の中にはチャート製のものも含まれている(同図 24)が、二次調整の位置や平面形態から、ナイフ形石器等に転用しようとした可能性も考えられる。

・金原遺跡及び前原遺跡(図5)

金原遺跡では11カ所の石器集中部が検出されている

が、3号ブロックがV層・IV層下部段階の石器群として報告されている(宮代町教育委員会 2013)。

このブロックにおいて小形のナイフ形石器が出土している。信州系黒曜石を用いており、素材を横位に用いて一側縁に二次調整を施している。二次調整は背面側に及ぶように施されているため、やや平坦調整に近い様相を呈している。また、ホルンフェルス製と頁岩製の角錐状石器が相伴している。特に、ホルンフェルス製の角錐状石器は基部が半円形を呈するように調整が施される。また、刃部も一部残し、縁辺の平面形も直線状になる。そのため、ナイフ形石器との区分の分離が困難である。石

材の消費としては、頁岩製の盤状の原礫を持ち込んでおり、残核は残していない。

前原遺跡において2つの石器集中部が検出されている(宮代町教育委員会 1983)。そのうち、2号ブロックがV層・IV層下部段階のものとして考えられる。

石器石材は高原山産の黒曜石を主体とし、珪質頁岩、安山岩、チャート、メノウ等が含まれる。ナイフ形石器は黒曜石以外の石材が用いられており、打面を基部側に設定して残置するように製作している。これに対し、角錐状石器の製作には高原山産黒曜石が用いられている。いずれも素材を横位に用いて製作されている。また、こ



図3 新屋敷遺跡C区・D区出土石器(S=1/3)

これらのナイフ形石器・角錐状石器はいずれも小形である。

接合資料の中には亜円礫の高原山産黒曜石のものが多く認められる。また、これらの残核も認められるため、本遺跡内では積極的な母岩消費も行われたと考える。

・明花向遺跡C区(図6)

本遺跡では礫群に伴って、6カ所の石器集中部が検出されている(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983)。総点数421点の石器が当該期のものと捉えられている。ナイフ形石器は34点出土し、その多くは黒曜石製である。ナイフ形石器の形態は素材の用い方で2つに分かれる。縦位に素材を用いる場合(同図 1～5、7～8)、打面部は基部側に設定される傾向が強く、一側縁部に二次調整が施される。また、一部のナイフ形石器の裏面には、先端部や基部に背面からの平坦剥離が施される場合が認められる(同図 1・4)。これとは対照的に、切出形石器は素材を横位に用いて、刃部が直交するように2側縁へ調整が施されている(同図9～12)。角錐状石器と思われる石器は欠損品が認められるが(同図 15)、完形であっても小形のものであると推定される。

石核は黒曜石製のもので、大形の剥片ないし亜角礫を素材に縁辺を回るように剥片剥離が施される。

石器石材は黒曜石が圧倒的に多いが、珪質頁岩製のナイフ形石器(同図 2・5)も認められる。これらも黒曜石製のものと同様の加工が施されている。

・大和田高名遺跡第Ⅱ文化層(図7)

本遺跡では礫群に伴うように18カ所の石器集中部が検出されている(大宮市遺跡調査会 1992)。平面分布では2～4号ブロック、5～19号ブロックの2つのまとま

りとして大別することが可能である。

本遺跡では、石器集中部間における遺物の分布密度に大きな差異が認められるが、2～4号ブロックは各石器集中部の遺物密度が高い。そのうち、2号ブロックと4号ブロックでは黒曜石製の石器が多量に出土している。

2号ブロックでは、星ヶ塔・和田峠産の黒曜石が主体となっている。切出形石器も出土しているが、その二次調整は急角度なものではなく、調整部分がやや平坦になるように加工されている。また、剥片剥離がある程度施された信州産黒曜石の石核を遺跡内に持ち込み、残核として廃棄するまで消費する過程も、接合関係から伺える。

これに対し、4号ブロックも黒曜石製の石器が主体を占めるものの、多くは原産地が箱根産の範疇である上多賀とされている。和田峠産の黒曜石はナイフ形石器に1点認められるのみである。石核は黒色安山岩と黒色頁岩のものが認められるが、いずれも盤状の大形剥片を遺跡内に持ち込んで消費していたと考えられる。

3号ブロックにおいて出土しているナイフ形石器にも2号ブロックと同様に、二次調整の部分がやや平坦になるように加工されているものが含まれる。しかし、本ブロックでは安山岩製のナイフ形石器が出土しており、他遺跡とは様相が異なるように見受けられる。また、本ブロックの石器石材の構成は2・4号ブロックと比較しても多様で、黒色安山岩や珪質頁岩、チャートが含まれる。但し、チャート製及び安山岩製の角錐状石器の欠損品からは、これらの角錐状石器は小形品であったと考えられる。また、前述した大形の安山岩製のナイフ形石器においても、裏面に平坦調整が認められる点など、2号ブロッ



図4 滝の宮坂遺跡(S=1/3)

クと共通する要素も確認できる。

4号ブロックの分布は2・3号ブロックからも離れている。総点数は326点だが、その多くは信州産黒曜石の剥片・碎片類である。ナイフ形石器は1点出土しているが、二次調整の範囲がほぼ全周に及んでおり、角錐状石器と区分するのが困難である。

2号ブロックと3号ブロックにはそれぞれ礫群が共存しており、礫群間では接合関係がある。また、ナイフ形石器の形態や黒曜石原産地分析の結果から同一時期に形成された可能性が高いとされている。これに加え、4号ブロックも遺跡内での平面分布、ナイフ形石器の形態から同一時期のものである可能性が高い。

以上、大宮台地の大宮台地のd群の石器群及びそれに該当する可能性のあるものを検討した。

新屋敷遺跡C・D区、滝の宮坂遺跡、明花向遺跡C区は従前から黒曜石の小形ナイフ形石器群の遺跡として認識されていたが、大和田高名遺跡でも同様のものが2～4号ブロックにおいて認められた。

これらの石器群は大宮台地内の北西端から南東に向かって等距離の間隔をもって立地する傾向にある。更に、これらの遺跡の各石器集中部で出土するナイフ形石器や角錐状石器の点数は、南東方向に向かうほど少なくなる傾向にある。加えて、新屋敷遺跡C区・D区では、その大半が信州系黒曜石であったのに対し、最も南東部に位置する大和田高名遺跡2～4号ブロックでは黒色安山岩や黒色頁岩、チャートといった石材の割合が多くなる。

加えて、金原遺跡や前原遺跡で見受けられるように、大宮台地内の北西―南東軸から外れたところに立地する

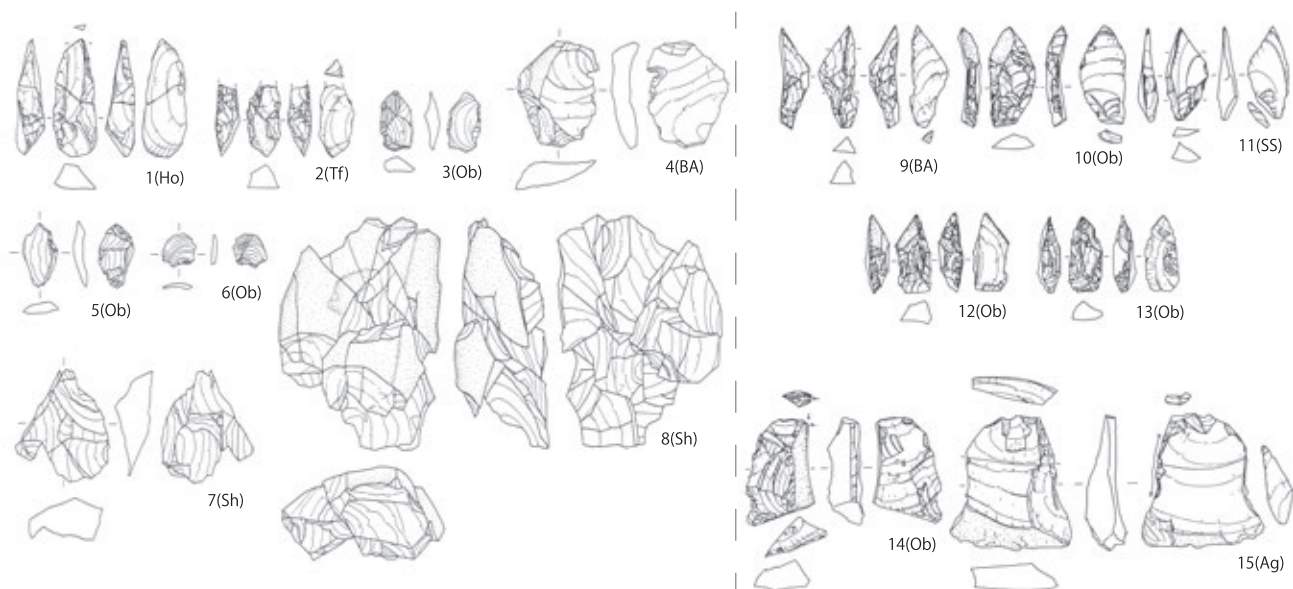


図5 金原遺跡(左)と前原遺跡(右) (S=1/3)

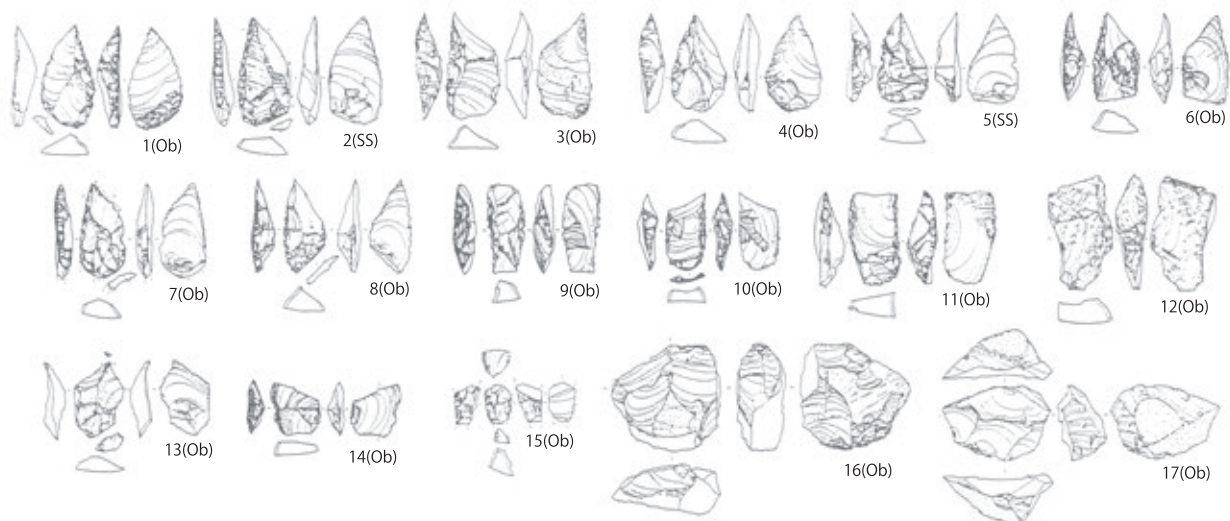


図6 明花向遺跡C区 (S=1/3)

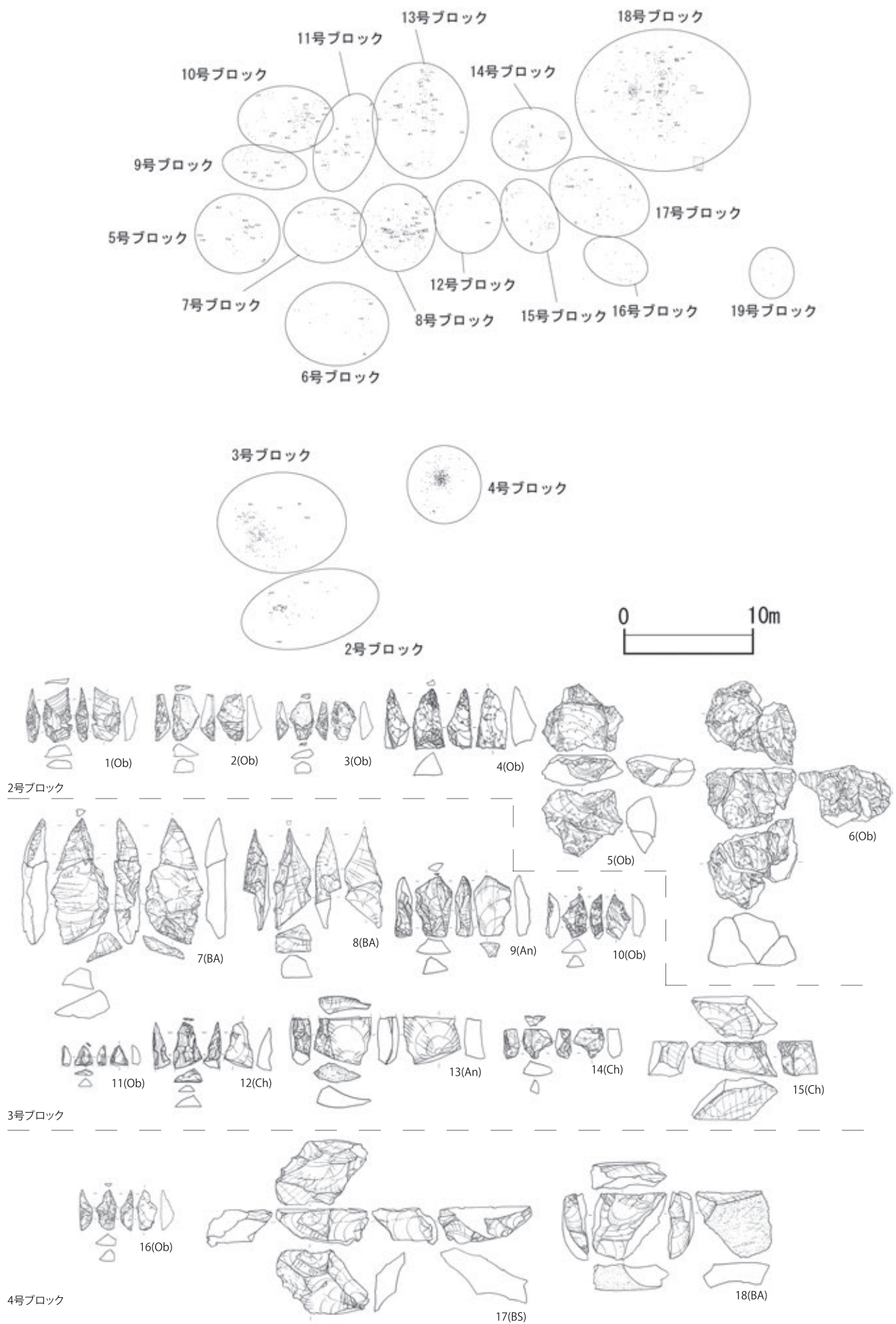


図7 大和田高名遺跡第Ⅱ文化層の分布図(上段：分布図は報告書を基に改変)と2～4号ブロックの出土石器下段(S=1/3) 9

遺跡では、メノウやホルンフェルスといった石材も用いられているため、多様性があるように見受けられる。

4. 考察

これまで赤城山南麓と大宮台地でみられる小形ナイフ形石器を伴う石器群を概観してきた。

新屋敷遺跡C区・D区などにみられる黒曜石製の小形ナイフ形石器群は赤城山南麓では殆ど見受けられない。これとは対照的に、大宮台地まで南下すると、黒曜石製の小形ナイフ形石器群の遺跡規模は、南下するにしたがって漸進的に減少する傾向にある。

赤城山南麓と大宮台地の石器群では、各遺跡内・各石器集中部内における黒曜石の割合が大幅に異なるため、石材では共通する点では少ないように見受けられる。しかし、ナイフ形石器や角錐状石器の石器製作技術において共通項がある。

まず、製作されるナイフ形石器はいずれも2～4cmの規格に収まる傾向が強い、また、これらのナイフ形石器の一部に、腹面の基部側を中心に背面側から平坦調整を加えるものが一定数見受けられる。加えて、製作される角錐状石器がいずれも小形である上に、平面形態において縁辺が直線状になるよう二次調整が加えられることから、ナイフ形石器との分別が困難なものが多い。

これらのことから、赤城山南麓と大宮台地で見られる小形ナイフ形石器群は、用いられる石器石材が大きく異なるが、技術基盤には通底していると判断できるため、同一時期の所産である可能性が高いと言える。

では何故、赤城山南麓の黒曜石製の小形ナイフ形石器群が殆ど見られないのであろうか。現在考えられる理由としては、当該期的人类集団が中部高地で黒曜石の原石を獲得して関東平野に進入する際、主な狩猟活動の地域が大宮台地以南の地域であったため、石材の消費を抑えるため、赤城山南麓近辺では、近傍で採取可能な黒色安山岩や黒色頁岩に石材の消費を限定させたと想定することが可能ではないか。

しかし、これを検証するには、赤城山南麓～大宮台地内の石器群を一度まとめ直した上で、改めて現在の分類案を整理する必要がある。また、これらの黒曜石原産地により近接する中部高地での様相も踏まえた上で議論しなければならないだろう。

謝辞

本論を執筆するにあたり、資料の実見の際には以下の機関の方々にお世話になった。感謝申し上げます。(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、さいたま市教育委員会、宮代町教育委員会

なお、本研究には『公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団平成28年度職員自主研究指定交付金』を使用した。

註

(1) 図中での石器石材の略称は以下のとおりである。BA＝黒色安山岩、An＝安山岩、BS＝黒色頁岩、Ch＝チャート、Ob＝黒曜石、SS＝珪質頁岩、Sh＝頁岩、Ag＝メノウ、Tf＝凝灰岩、Ho＝ホルンフェルス

引用文献

- 新井房夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学研究紀要 自然科学編』10-4 pp1-75 群馬大学
- 伊藤健 1991 「ナイフ形石器の変異と変遷」『研究論集』10 pp81-107 東京都埋蔵文化財センター
- 大宮市遺跡調査会 1992 『大和田高名遺跡』
- 菊池隆男 1981 「先史時代の利根川水系とその変遷」『アーバンクボタ』19 pp2-5 (株)クボタ
- 国武貞克 2003 「両面体調整石器群の由来—関東地方V層・IV層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性—」『考古学』1 pp52-77 安齋正人
- 2008 「回廊領域仮説の提唱」『旧石器研究』第4号 pp83-98 日本旧石器学会
- 2014 「関東・中部」『日本旧石器学会第12回講演・研究発表シンポジウム予稿集 石材の獲得・消費と遺跡群の形成』pp55-59 日本旧石器学会
- 2015 「黒曜石の獲得からみた関東・中部地方の移動領域」『旧石器研究』11 pp79-96 日本旧石器学会
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『高林西原古墳群』
- 2008a 『天ヶ堤遺跡(2)』
- 2008b 『上武道路・旧石器時代遺跡群(1)』
- 2010 『上武道路・旧石器時代遺跡群(2)』
- 小菅将夫 大工原豊 麻生敏隆 編 2004 『群馬の旧石器』みやま文庫
- 小原俊行 2016 「関東地方北西部における浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群」『岩宿フォーラム 2016 ナイフ形石器文化の発展期と変革期—』pp28-41 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984 『明花向・明花向上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』
- 1996 『新屋敷遺跡C区』
- 1997 『滝の宮坂遺跡』
- 1998 『新屋敷遺跡D区』
- 須藤隆司 1989 「中部槍先尖頭器文化の成立」『長野県考古学会誌 シンポジウム特集号 中部高地の尖頭器文化』pp111-134 長野県考古学会
- 関口博幸 2008 「後期旧石器時代における前橋泥流をめぐる遺跡形成史」『更新世の地形発達史と遺跡群の形成』pp36-43 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 早田勉 1992 「群馬県の自然と風土」『群馬県史 通史編1』pp37-129 群馬県
- 田代治 1997 「大宮台地の概要」『埼玉考古別冊第5号・特集号 埼玉の旧石器時代—』pp7-13 埼玉考古学会
- 田中英司 1993 「旧石器時代の遺跡」『中川水系 人文』pp5-15 埼玉県
- 西井幸雄 1991 「南関東地方における武蔵野台地第IV下層～第VI層のナイフ形石器」『埼玉考古学論集：設立10周年記念論文集』pp63-89 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 2001 「新屋敷遺跡出土石器の再検討」『第7回石器文化研究交流会発表要旨』pp31-38 石器文化研究会
- 2004 「大宮台地における石器群の変遷」『山下秀樹氏追悼考古論集』pp75-84 山下秀樹氏追悼論文集刊行会
- 堀口萬吉 1981 「関東平野中央部における考古遺跡の埋没と地殻変動」『地質学論集』20 pp79-94 日本地質学会
- 1993 「第3節流域の変遷 2 台地の形成とその変遷」『中川水系 総論・自然』pp164-167 埼玉県
- 町田洋 新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—」『科学』46 PP339-347 岩波書店
- 宮代町教育委員会 1983 『前原遺跡』
- 2013 『金原遺跡—旧石器時代編—』
- Matsuda.I 1974 Distribution of the Recent Deposits and Buried Landforms in the Kanto Lowland, Central Japan. Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University, no.9, pp1-36